

アフリカ文学と Oral Literature (3)

—ヴァン・デル・ポストとブッシュマン

赤 岩 隆

要旨：ブッシュマンをめぐる研究と云えば、なにより人類学者の手によりなされるものと決まった感があるが、こうした研究の道筋を最初に切り拓いたのは、まぎれもなくひとりの文学者だった。南アフリカの作家、ローレンス・ヴァン・デル・ポストがその人である。その主な業績のひとつである *The Lost World of the Kalahari* の分析を通じ、文学の側からブッシュマン、あるいは、その貴重な文化遺産である oral literature にアプローチするための可能性を模索する。

1

一転してブッシュマンについて書いてみたいと思う。というのも、oral literature が、なにより無文字社会を前提とするならば、ブッシュマンの世界こそは、それを求めるのにもっとも相応しく思われるからである。また、この点が、いわゆるバンツールの黒人たちとの違いでもある。たしかにバンツールの黒人たちの社会にも、もともと文字は存在しなかった。けれども、侵略者である白人との軋轢や衝突、あるいは、そののちにやってきた苛酷な奴隷化の過程を通じ、否が応でも文字化せざるを得なかった。いうまでもなく、そのように採用された文字とは異言語に属したから、いかほど文字化されたとはいえ、その社会には本来的な oral literature の要素が多分に残されたはずである。といて、いったん動き出してしまった歯車を元に戻せるわけもなく、かつての異言語は徐々に国語化し、それにともない oral literature の要素も容赦なく欠落してゆくことになるだろう。

むろんブッシュマンの世界にも文明化の荒波は押し寄せている。カラハリの不毛な砂漠の奥に隠れ、西欧の近代文明とは断固として袂を分かちながら暮らしてきたかれらですら、太古以来の生活様式、伝統や信仰、美的な感受性を完全には維持できなくなりつつある。いずれかれらが語り伝えてきた oral literature も、同様の憂き目に遭うことになるのだろうが、それでもなおかれらの世界には、より純粋な形で oral literature が生き残っている。世界中の人類学者がカラハリ砂漠の奥に入り込み、さかんにフィールドワークしたがるわけもそこにこそ由来している。じっさい、ブッシュマンをめぐる研究全般は、そうした人類学者たちの熱意ある行動により支えられていると云っても過言でない。そこに安易に文学者の入り込む余地も下地もなきに等しいのは、なんとも寂しいかぎりだが、じつを明かせば、確固とした知的動機に動かされ最初にカラハリ砂漠の奥に踏み込み、また、そうすることでより純粋なブッシュマンとの接触を試みたのは、まぎれもなくひとりの文学者だった。南アフリカの作家、ローレンス・ヴァン・デル・ポストがその人である。日本では映画『戦場のメリー・クリスマス』の原作者として一躍名を馳せたが、ヴァン・デル・ポストが世界的名声を勝ち得たのは、それよりはるか以前、一本の記録映画と一冊のノン・フィクションによってであった。 *The Lost World of the*

Kalahari と題された記録映画および同タイトルのノン・フィクションは、アフリカ南部の片隅に、いまなお原始さながらの生活様式を守りながら暮らすブッシュマンという人たちの存在を世界に広く知らしめた。人類学者たちがさかんにカラハリ砂漠に足を伸ばすようになるのは、まさにそれよりあとのことである。そうしたヴァン・デル・ポストの業績に続くべき文学者の側からの研究が少ないことは、返すがえすも残念だが、その時点に戻り、遅まきながらの反省を加えてみることは決して徒ではないだろう。本稿はそのためのささやかな試みのひとつである。

2

ローレンス・ヴァン・デル・ポストは、オレンジ自由州のフィリポリスで生まれた。一九〇六年の十二月のことである。十五人いた子どものうちの十三番目であった。ボーア戦争の折にはコマンドとして身体を張って戦った父親は、オランダからの新参の移住者のひとりだったが、母親はグレート・トレック以前に遡る古い移民の血を受け継ぐ生粋のボーア人だった。フレデリック・カーペンターがその著書において執拗に拘泥させてみせているように、片やヨーロッパとの絆をいまだ色濃く残しながらボーア人の自由と独立のために戦った父親と、もはやアフリカ人と呼んで差し支えないほどの土着をなし遂げた母方の家系を持ったことは、ヴァン・デル・ポストをひとりの個性ある作家として成り立たせてゆくうえで意義深い役割を果たすことになる (Carpenter, 1969, pp.18-28)。

ブルームフォントンの高校を卒業したヴァン・デル・ポストは、大学には進まず、ダーバンに赴き新聞記者となる。そこで、ウィリアム・ブルーマー、ロイ・キャムベルという同年代のふたりの作家志望の若者と知り合う。一九二五年のことである。ヴァン・デル・ポストとは違い、イギリス帰りのふたりは、二十年代のヨーロッパにおけるモダニズムの洗礼を受けており、いまだ文化的後進国であった南アフリカの市民らしからぬ先鋭的な作品を発表してゆく。そのふたりに誘われて、ヴァン・デル・ポストはラディカルな文学雑誌フォールスラッハ (*Voorslag*) の創刊に参加するが、第三号まで出したところで三人そろって編集から手を引き、ひょんなことからブルーマーとともに短期間日本を訪れる。帰国後、ひとりの女性と知り合い結婚しロンドンに移り住むが、一九三四年に最初の小説 (*In a Province*) を世に問うたあとは、第二次大戦の開戦と同時にイギリス陸軍に志願し、各地を転戦したのち最後にはインドネシアで日本軍の捕虜となる。そのときの経験は戦後になって実を結ぶが (*A Bar of Shadow*, 1954)、ふり返ってみれば、最初の小説を出して以来除隊するまで、じつに十数年間にわたって実質的な創作活動には手を染めなかった計算になる。

戦後すぐ最初の結婚を解消し二度目の妻を迎えた。それ以後、人が変わったように活発な創作活動に入るのだが、きっかけとなったのは、ひとつにはユングとの出会いであり、ひとつには、今回集中的に取り上げることになる、南アフリカ内陸部において実施された数次にわたる調査探検であった。前者によって人間の心の次元における内奥の旅へと目を開かれ、後者においては、文字どおり物理的な次元で地理的奥地へとむかう冒険旅行を敢行したわけだが、ヴァン・デル・ポストの意識のうえでは、両者は神秘的に重なり合い、互いに補い合いながら互いをよりいっそう豊かなものとし合うような関係を育むに到る。結果として以後十年ほどのあいだに生み出されたのは、かれを作家として世界的な地位にまで押し上げる、一群のフィクショ

ンやノン・フィクションだったのだが、それらの中心に位置していたのが、*The Lost World of the Kalahari* だったのである。

3

最初の遠征は、一九四九年、イギリス政府の依頼を受けて参加したものだ。行き先はイギリスの保護領時代のマラウィ、ニヤサランドである。このときの成果は、一九五一年出版の *Venture to the Interior* となるが、ヴァン・デル・ポストにとっては、じつに十七年ぶりに世に出た二冊目の著作であった。これによりヴァン・デル・ポストは、にわかに世界の熱い注目を集めることになる。続いて一九五〇年から五二年にかけて、同じくイギリス政府の遠征隊とともに三度カラハリ砂漠に赴いた。ところで、問題の *The Lost World of the Kalahari* の記録映画および著作の元となったのは、それらとは別に、一九五五年私的に企画実施された遠征であった。記録映画は翌年 BBC を通じて放送され、著作はそれより遅れて一九五八年に出版された。

すでに三度にわたりカラハリの調査探検を済ましなが、さらにもう一度、今度は私的な組織によりカラハリ探検を企てたのには、それなりの理由があった。すなわち、それまでの探検のまったく実利的だった動機を捨て、「文明からもっとも遠く離れて暮らすもっとも純粋なブッシュマンを探し出し、その最古の神話と踊りを記録に収める」という、より非実用的な目的を果たしたかったからである (Ibid., p.71)。と同時に、それとはおよそ正反対に、ブッシュマン保護の必要性を世論に訴えかけるというきわめて実際的な目的をもこの旅は背負っていたのだが、それよりもなによりも、その折の企画には、アフリカに生まれ育ったヴァン・デル・ポストならではの、個人的存在に関わるような意義が付着していた。タイトルに謳われている「失われた世界」を求める旅とは、純粋なブッシュマンの姿がすでにみられなくなっていた自身の少年時代の空しい記憶を踏み越えてゆく旅を意味し、さらにはヴァン・デル・ポストの先祖がアフリカの地に足跡を印した、そもそもの歴史の発端すら越えてゆこうとする旅だからである。くわえてその旅は、いかにも作家の試みらしく、とりわけユングの影響を受けて自身の内面的な探求と分かち難く二重化していた。いずれにおいても果たすのに困難な課題を抱えた試みであったが、それに立ち向かうヴァン・デル・ポストその人の態度はあくまでも真摯であり、したがって、記録映画および著作の視聴者や読者の心を動かすに余りある成果を収めたのはいうまでもない。

さて、本稿にとっては、じつはここからが問題である。というのも、本稿を含む一連の議論の基本となる課題とは、アフリカ文学と oral literature との関わりを探ることにあるのだが、その意味では、必ずしも本稿の目標とヴァン・デル・ポストのめざしたところとは一致しないからである。少なくとも、カラハリ砂漠の最奥をめざすヴァン・デル・ポストの頭のなかには、oral literature をそれとして特別に問題化する意識はなかったはずである。とはいうものの、本稿の最初で云ったように、ブッシュマンの世界がいわゆる oral literature のごく自然な宝庫であることも否定できない事実である。とするなら、具体的議論に入るに先立ち、両者のあいだをあらかじめ調整しておく必要があるだろう。ヴァン・デル・ポストの著作からなにを教えてもらい、それを本稿の議論にどのように有効に役立ててゆくか。次にそれについて考えてみたいと思う。

前三回のカラハリ探検と四回目の私的な探検との違いは明白である。前三回の探検は、なによりカラハリ砂漠それ自体を対象としたが、四回目の私的な探検は、そこに暮らすブッシュマンの探索を、試みの最終的な到達点に置いていたからである。一九四九年に実施されたニヤサランド探検も含めて、それまでの探検が、経済的動機に動かされていたことは明らかである。広い領土を持つこと自体に意味があるといった帝国主義的な考え方は、疾うの昔に時代遅れになっており、どの植民地保有国も、より効率的な植民地再編の必要に迫られていた。一九六〇年がアフリカ独立の年と呼ばれ、かつての植民地の多くがその年に独立をなし遂げたのも、まず第一に、そのような再編作業の結果だったのである。こうした経済効率的な観点に立つならば、ブッシュマンの探索など、いかなる意味においても探検の目的に値しない無益な試みだったに違いない。かれらが持てる者のために、さらなる富を生み出してくれるとは、到底考えられなかったからである。それどころか、足手まといにしかならない。だが、ヴァン・デル・ポストは、それゆえにこそこの試みには意味があると考えた。というのも、当時の南アフリカの状況をみれば解かるように、人種差別と経済的富の追求の動機とは本質的に切っても切れない関係にあったからである。とするなら、ブッシュマンという原始人さながらに暮らす人たちの探索、あるいは、あらゆる経済的な意味において不毛な荒野にほかならないカラハリ砂漠の奥に踏み込むことには、そうした価値観を逆転させるための象徴となり得る見込みがあることになる。しかも、そうした見込みは、ただ抽象的思考や議論を重ねた末に到達されたものではなかった。その裏付けとなるような、ささやかだが確実な経験の記憶がヴァン・デル・ポストにはあったからである。ほかでもない、かれが少年時代をすごした祖父の農園では、ブッシュマンもホッテントットもグリカ人もベチュアナ人もプア・ホワイトもなんの区別もなく、共同して働きながら幸福に暮らすことができたという（van der Post, 1958, p.55）。もちろんそれは、いまとなって思えば、ほんの束の間の夢のような出来事ではしかなかったし、すでに遠く「失われた世界」に没し去ってしまっていたのだが、ヴァン・デル・ポストは、そうした「失われた世界」を取り戻そうとする。それにより現実に流布している価値の順序を逆転させ、同時に、自身がアフリカーナ＝搾取する側に属するという否定し難い事実、あるいは、それに由来して心の奥底に巣くう度し難い罪悪感を開かれた世界や未来にむけて解き放とうとするのである。

第四回目のカラハリ砂漠探検を私的に企画し実行に移すようヴァン・デル・ポストを促したのは、そのような動機であった。ようするに、*The Lost World of the Kalahari* の冒頭部に記されている、ブッシュマンの「純粹な生き残りを発見」という探検の理由付けとは、それだけみれば、水面上に出た氷山の一角にも等しい旅の現象面を説明したにすぎなかったということである。同時にそれは、目にみえない次元において進むべき方向を示唆していた。その意味でブッシュマンとは、探検にともなうあらゆる実際の行動の口実でもあり、すべての試みの象徴、複雑に絡み合う諸々のベクトルの結節点ともなり得たわけだが、ようするに、探検者ヴァン・デル・ポストその人と、ブッシュマンの提供してくれる oral literature とは、そうした基本的構造のうえでこそ接触する。すなわち、個々の神話や説話の取舍選択、それらを対象とした意味付けや具体的な解釈はすべてそれに則った形で行われることになる。とするなら、本稿に科せられた問題解決という観点からみて、そこにはメリットもデメリットも認められることになるだろう。すなわち、メリットとは、ブッシュマンという存在が旅の試み全体の最深部に位置

する当然の結果として、必然的に oral literature がそれに隣り合わせるによりもたらされるメリットのことである。それらのメリットを優遇することにより本稿は、oral literature それ自体が持つ性質に対してより本質論的に迫ることができるだろう。逆に、デメリットとは、そうした基本的構造に則り取捨選択された結果として、具体的テキストの拡がりという点で避け難い偏りが生じるということである。ブッシュマンが代々語り伝えてきた貴重な遺産を全体として評価してこそみえてくるはずの oral literature の側面が、結果としてごく部分的にしかみえなくなってしまう。だが、ヴァン・デル・ポストのこのユニークな著作により提供されるものの実体がそうしたものであるなら、その限界を見極めながら先の議論へと継げてゆくしかないだろう。また、そうしてこそ、ヴァン・デル・ポストにより先鞭をつけられたブッシュマン研究のそもそもの発端に戻り、文学的に正しくそれを評価することにもなるだろう。

5

少年時代のヴァン・デル・ポストにとってのブッシュマンとは、つねに誰かの語る物語のなかにのみ登場する存在であった。すなわち、間接的に、断片として存在したということなのだが、それというの、かれの生まれ育った二十世紀初頭においては、すでに周囲の世界からブッシュマンの姿は「消え失せて」しまっていたからである。なるほど、かれの農園には祖父の手で奉公人として仕込まれたふたりの老ブッシュマンもいればブッシュマンの乳母も暮らしていたのだが、それらにしたところで、いわゆる野生のブッシュマンからは遠く離れた存在でしかなかった。それどころか、そうした中間的な「飼い馴らされた」ブッシュマンの存在により、かえってヴァン・デル・ポスト少年の好奇心は激しく煽られることになる。結果として、かれにとり憑いた「ブッシュマンとは何者か」という疑問は、よりいっそう心に深く刻み込まれてゆく。ヴァン・デル・ポスト少年は、集められたさまざまな断片的情報を総合し、失われた人たちの姿を、その住む世界の成り立ちの様子を想像力豊かに想い描こうとするのだが、重要なのは、情報の断片という断片が、あるいは、ブッシュマンという存在それ自体が、すでに避け難く物語化してしまっていたということである。そうした状況のなかから、新たな文学が生まれてくるといったことは特段珍しくもない現象であり、ヴァン・デル・ポストの場合もその顕著な一例だったというわけだが、ところが、そのように物語化され幾重にも隔てられた状態では、どんな謎の解きようもあるはずがない。したがって、想定される謎や疑問の解明は、別の形でそれらを解きほぐすよう迫る新たな必要を招き寄せるばかりで、結果として、ヴァン・デル・ポスト少年の健気なブッシュマン探求の試みは、初手から激しく迷走することになる。それが証拠に、*The Lost World of the Kalahari* の「消え失せた人びと」と題された第一章におけるかれの探求の眼差しは、それからそれへと奔放に拡散してゆく。解剖学者によって「ステアトパイジア（脂肪腎症）」と命名されたブッシュマンの尻の話からはじまって、背丈が低いということに対する根深いコンプレックス、ハンターとしての先天的才能を示す事例の数々、アフリカの土地や自然の動植物とのあいだに神秘的とも宇宙的とも取れる調和した関係を切り結びながら進められる日常の生活、音楽および楽器、踊りと唄、洞窟のなかで語り継がれてきた物語、類まれな視覚的才能を証拠立てる多数の岩絵の存在等々といった具合にである。もちろん、書き手であるヴァン・デル・ポストの並々ならぬ手腕と態度の真摯さとは、そうした奔放な拡散の結果、試みが無意味に墮するのを巧みに防いでいる。とりわけ、ベチュアナ族の羊飼

いの老人のしてくれるキリンの話、蜂蜜占いと呼ばれる小鳥とブッシュマンとの共存共栄の話、あるいは、ブッシュマンの泉の話などは、逸話として逸品とみなせる美しさを備えているのだが、皮肉にもと云うべきだろうが、結局のところ、情熱と好奇心の強さだけは誰にも負けない体当たりの探求の結果、ヴァン・デル・ポスト少年にとってブッシュマンという存在は、よりいっそう遠いものになってしまう。謎を解くどころか、求めるブッシュマン像が少年の情熱溢れる好奇心を吸い取るように不必要に肥大化し、その伝説としての様相を強めてしまうからである。

そうした皮肉な結末からの脱却を図るべく、「消滅の過程」と題された第二章において、ヴァン・デル・ポストは、ブッシュマンが姿を消した足どりを歴史的観点から丹念に辿り直してみせる。それにより炙りだされてくるのは、白人だけでなく、バンツの黒人やホッテントットまで含めた形での、ブッシュマンとのあいだに切り開かれた取り繕いようのない隔たりであった。たとえば、「ブッシュマンとは何者か」という問いに対する歴史的な回答によれば、ブッシュマンとは、野生動物にも比するような劣等な存在であり、なまじ知能のあるぶん危険であると考えられた (Ibid., p.36)。そうした認識から読み取れるのは、徹底した軽蔑と誤解、抑圧と歪曲、殺戮と排除の姿勢だけであり、いくら事実を探ってみたとところで、不幸にも、それらを除けばなにひとつ炙りだされてはこなかった。しかも、どれほど積極的にブッシュマン擁護の発言を繰り返したところで、先にも述べたように、自分自身がそうした隔たりのこちら側に属しているという現実には変わらない。考えてみれば、少年の日に熱心に蒐集した物語化されたブッシュマンの痕跡とは、それら歴史的に明示された隔たりや亀裂の具体相に、ノスタルジーの衣を纏わせ裏返したものにすぎないのではないか。正負の違いはあるにせよ、それらにより証拠立てることができるのは、歴史的な事実の集積同様、埋め難い亀裂ばかりなのではないか。かくて、ヴァン・デル・ポストは、少年の日に日記に記した想いをついに実行に移そうと決意する。「自分でブッシュマンをみつけにゆこう」と (Ibid., p.67)。目のまえに広がる隔たりと亀裂を直接自分の力で越えるべく、内奥の旅へと乗り出してゆくのである。

6

二十代のころ、ヴァン・デル・ポストは、いたたまれずブッシュマンを探しにカラハリ砂漠に入ったことが二度あった。だが、「大乾燥地帯の外辺」で見つけられたのは、「ブッシュマンで通っている悲しい混血種」にすぎなかった。また、前三回の組織的探検の折には、「本物のブッシュマンとの束の間のじれったい出会いが何度かあった」ものの、「この問題だけを独立させて追求し正しい結論を引き出す」までには到らなかった。その後、自分よりも資格の備わった人たちが相手に、「手遅れになるまえにブッシュマンのなかに入り込み、それとともに暮らし、その生活方法や精神構造を解明する作業に取り組むよう説得して」みたが、どこからも色好い返事は得られなかった (Ibid., p.66)。ここでもまた、偏見と無理解の亀裂にゆく手を阻まれたわけだが、自力でやると決心したあとの展開はむしろ速やかだった。しかるべき友人たちの協力、BBCの後援等必要な助力の約束を取り付けたヴァン・デル・ポストは、探検の時期としてわざわざ苛酷な乾季を選ぶ。というのも、「一年のうちで最悪のこの時期に、砂漠の奥地で生活できるのは真のブッシュマンだけ」だからである (Ibid., p.71)。半分飼いや馴らされたようなブッシュマンをみつけ、その「みせかけの原始性」などで満足するつもりは最初からな

かった。

とはいうものの、大自然をまえにした人間の試みが無力であるというのは、いつの時代にも変わらない。可能な限り近代的装備を施した末に臨んだ、最初のリヴァー・ブッシュマン探索の試みは、多大な骨折りにもかかわらず、カメラマンとのあいだに厄介ないざこざもあり無惨にも失敗する。だが、その失敗の過程で、「ブッシュマンが年に一度集会する場所」があるという話を聞きつける。やる気のないカメラマンを適任者に入れ替え、さっそくそこへとむかったが、岩山の岩盤に素晴らしい岩絵をみつけはするものの、ブッシュマンたちはすでに立ち去ったあとだった。異物の侵入を拒むかのように荒地はゆく手に立ちはだかり、探検隊は何度も弾き返されるが、ヴァン・デル・ポストはけっして諦めなかった。「来る日も来る日も、雲ひとつない青空の下、深い砂のなかを容赦ない陽の光に照りつけられながら、灌木や茂みを切り開きのろのろ進むという単調な仕事ばかりが延々と続いた」(Ibid., p.223)。だが、そうした執拗な試みに抗し得ず、堅牢な城砦のごとき不毛な大地も徐々にその秘密の扉を開いてゆく。そしてついに、探検隊は求める野生のブッシュマンの足跡を発見する。次いで若い男のブッシュマンとの接触にも成功し、その一族の暮らす集落に足を踏み入れることになる。

ところで、*The Lost World of the Kalahari* のテキストで云うと、この時点で物語はすでに全体の四分の三を経過している。ようするに、残り四分の一のスペースに、より直接的な意味での、「ブッシュマンとは何者か」という問いに対する答えは用意されているわけだが、事の大きさを考えれば、いささか狭いスペースに詰め込まれているといった印象は否めない。なるほど、この著作のより表面的な目標からすれば、そもそもの旅の発端から物語をはじめ、「純粋なブッシュマンの生き残り」を発見するまでの経過を紹介すれば事足りるわけだが、しかしながら、この著作がそうした旅の叙述によってテキストの中核が構成される、いわゆる探検記とは若干事情を異にしていることも忘れてはいけない。本稿のまえのほうで指摘しておいたように、ブッシュマンをみつけることそれ自体は、極端に云えば、旅の口実にすぎなかった。そうしたパブリックな目的に絡みつくようにして、あるいは、その深層に潜在するように、パーソナルな願望充足をめざすベクトルが認められるからである。ところが、そうしたベクトルに沿った結果報告は、いわゆる通時的な物語というよりはむしろ、水平方向に拡がる共時的なそれによって果たされるはずである。とするなら、後者に充てられるべきスペースが、全体の四分の一にも満たないというのは奇妙にバランスを欠いているようにもみえるが、こうなった理由としては、少なくともふたつ挙げることができるだろう。ひとつには、記録映画を撮るという、ヴァン・デル・ポストにとってはまったく未経験の不馴れな使命にふりまわされた結果だということ。これについては、五章、六章、七章と三つの章に亙って続く、最初のカメラマンであるユージン・スポイドとの確執をめぐる、不必要とも思えるほど詳細な叙述をみればなるほどと首肯けるだろう。さらには、ヴァン・デル・ポストの頭のなかにはすでに続篇の構想があり、舌足らずにしか書けなかった部分についてはそちらに廻すつもりでいたこと (Ibid., p.270)。事実、構想された続篇は、一九六一年出版の *The Heart of the Hunter* となるのだが、ここではさらに穿った見方をしてみたい。というのも、先に述べておいたように、タイトルにある「失われた世界」というのは、この著作においては二重に機能しているからである。ひとつには、文字どおり目にみえる次元でいう、かつてアフリカ南部のどこでも目にできたブッシュマンの世界を指す言葉として。ひとつには、それとは反対に、目にみえない次元でいう、ヴァン・デル・ポスト個人に関わる世界の空隙を指す比喩としてである。大まかに云って、パブリッ

クな探求は前者に属し、パーソナルなそれは後者に属すものと考えられるが、もちろん、テキストそれ自体はひとつしか存在せず、したがって、ふたつの探求は同時に行われることになる。いっぽうの探求の叙述とみえるものは、必ず他方の叙述にもなっているはずであり、じっさい五章から七章へと到るカメラマンとのいざこざを述べた部分についても同様に考えてよいわけだが、とりわけ重要な最後のふたつの章をめぐる議論に入るに先立ち、以上のような観点に見合う形で全体の読みをまずは整理し直しておくことにしよう。

7

The Lost World of the Kalahari のテキストは、全十章で構成されている。ジャンルで言えば、ノン・フィクションに属するが、全体の起承転結は比較的明瞭に読み取ることができる。すなわち、一章から三章までが起、四章と五章が承、六章から八章までが転、九章と十章が結といった具合にであるが、そうした結構を上述のような目にみえない次元、あるいは、パーソナルな探求の次元に戻したうえで簡単に物語を読み直すと、おおよそ次のようになるだろう。

アフリカ南部における探検を何度も繰り返すきっかけとなったのは、より直接的には公的な勧誘によるものだったが、物語の冒頭部でヴァン・デル・ポスト自身云っているように、「より深い意味においては、それよりはるか以前にこの旅ははじまっていた。じっさい、あまりにも遠い昔にまで遡るので、いつはじまったのか正確には決め難いほどなのだが、ただひとつ確かなのは、物心つくやいなや手袋が手にはまるように、ちいさなブッシュマンとその悲惨な運命とに、すっぱり心がはまっていたということである」(Ibid., p.3)。ここで重要なのは、すべての事柄が遠い昔にまで遡及するという点と、そもそもの最初の時点からそれが内面化されていたという点である。事の重大さについては、ヴァン・デル・ポストが生まれたのが半世紀もまえになることを思えば、誰にでも納得できるだろうし、辛うじて十数年まえに小説を一冊出しはしたが、それきり作家としては音なしも同然だった理由も、あるいは、それとは正反対にアフリカ探検と軌を一にして活発な執筆活動を開始した理由についても、おおよそ推測できるだろう。ようするに、ヴァン・デル・ポストの胸中には、トラウマとも呼び得るような黒々としたわだかまりがずっとあって、それを乗り越えるのに、十数年の日時とじつに多様な経験や試行錯誤、深い苦悩、あるいは、偶然のめぐり合わせといったものを必要としたわけなのである。その経過や複雑な絡み合いを明らかにするという興味深い作業については、純粹なヴァン・デル・ポスト論を主要な目論見とはしない本稿の役割からは残念ながら外れているのだが、ただ忘れてならないのは、*The Lost World of the Kalahari* というテキストが、間違いなく、上記引用のような意識を持って書かれているということである。外的に内奥へと接近してゆくということはつまり、内的にそれを果たすことになる。諸々の外的な障害とは、すなわち、内的に突破すべきそれをも意味していた。つまり、物語の起承転結とは、じつに内的探求のそれとびたりと重なるのである。

そんなふうに見てくると、現実に行われた探検の実際に即して付けられただけと思われる各章のタイトルも、じつにそれらしく意義を帯びてみえてくるから不思議である。たとえば、「起」の部分に属する第三章のタイトルは「誓いと手探りの年月」、「承」の部分に属する第四章と第五章は、それぞれ「突破」、「間に射す影」となっており、「転」に属する第六章と第七章のタイトルには、それぞれ「接近」、「失望」（あるいは「沼地」）といった語句が、あたかも

内的探求の同時進行を示唆するように使われている。それらに続く残りの第九章と第十章においてヴァン・デル・ポストはめざす内奥へと到達し、悲願である純粹ブッシュマンとの接触を果たすわけだが、とするなら、その詳細についても同様に「穿った見方」をしてよいことになる。それぞれ「泉の狩人」、「雨の唄」と本来的にはここでも即物的にタイトルが付けられているはずの各章においても、ずっと深い意味を読み込まなければならないことになる。そして、本稿がヴァン・デル・ポストを通じてより純正な形でブッシュマンや oral literature に出会うのも、じっさい、この次元を措いて外にはないのである。

8

ヌハウというのが最初に出会った若いブッシュマンの名前である。それに導かれ、探検隊はブッシュマンの集落へと入るのだが、当然のことながら、ここにきてヴァン・デル・ポストが浸る歓喜は尋常でない。

ついに発見したのだ！この事実には圧倒されて、しばらくなにをしたらいいか解からないほどだった。(Ibid., p.225)

けれども、わたしたちはかつてないほど満たされていた。そこにいと奇妙にも、やっと分け入った秘密の世界の間近にいるように感じられた。その腕に抱かれ深く呼吸する温かい胸にしっかり抱き留められているような感じがした。ついに発見したのだ！繰り返し失望を重ね、何千マイルにも互る暑く辛い旅を空しくも続けてきたあとだけに、その意味するところは、いくら強調してもしきれぬものではなかった。(Ibid., p.227)

探検隊は過剰に雄弁になって話に打ち興じ、ヴァン・デル・ポストはいささか悪乗り気味に、「ホテル・カラハリ」の夕食のメニューを書き上げる。そして、最後には、「これからここにいるあいだ、覚えておいてもらいたいことがある」と説教混じりに皆にむかって探検の使命をあらためて指摘する。

ここにきた目的は、ブッシュマンになにかを教えるためではなく、かれらから学べるすべてを学ぶためなのだ。かれらの風習、魂、そして、あまりにも苛酷なためわれわれのうちもっとも貪欲な者ですら敬遠するこの世界で、いかにかれらが自身の人生と折り合いを付けてきたか、それを学ぶためなのだ。(Ibid., p.228)

こうした引用からも明らかに嗅ぎ取れるように、ヴァン・デル・ポストは、ブッシュマンとその世界をこのうえもなく理想視している。煩雑になるからいちいち引用は避けるけれども、じっさい、ヌハウとの邂逅以降、ほほどの文章からもその証拠を挙げることができる。もちろん、こうなった理由のひとつは、「何千マイルにも互る暑く辛い旅を空しくも続けてきたあと」だからに相違ないが、ここではそれ以上に、遠く少年の日から片時も消えることのなかった、「ブッシュマンとは何者か」というそもその問いに関連しているとみてよい。とって、ノスタルジーだけがそうさせているわけではない。大部分は、問題解決のとぼぐちにやっと立て

たという率直な感動の成せる業なのだが、それにしても、ここで当の問題解決は、そうした問いの答えへと直線的にむかうわけではなかった。というのも、いかに理想化を重ねたところで、どんな問いの答えも出せはしないからである。より純粋なブッシュマンをみつけ、そこから「学べるすべてを学ぶ」だけでは、依然として謎のまゝに立ち尽くしたままである。しかしながら、じつはヴァン・デル・ポストにすれば、それでいっこうに構わなかった。なぜなら、ここでいう問いや謎とは、先に指摘しておいたように、けっして外的なものではなく内的なものを指しているからである。内奥とは、外に存在するものではなく、文字どおり内側にみつけられるものだった。とするなら、「ブッシュマンとは何者か」という問いに答えるには、より純粋なブッシュマンをみつけ、そこから「学べるすべてを学ぶ」だけでよかった。たとえそこでパブリックな作業が停止してしまったとしても、あとの作業は、パーソナルな意味でのそれが引き継ぐことになる。そしてまた、その末に導き出されたものこそ、「ブッシュマンとは何者か」という問いの、より真正な答えでもあったからである。

9

それにしても、カラハリ砂漠の奥に入り込み野生のブッシュマンをみつけただけでは、あるいは、その生きざまを詳しく観察しかれらと親しく交じり合っただけでは、どんな問いの答えも出せないとは、あまりにも酷しすぎる成り行きと云わなければならないだろう。とはいえ、ヴァン・デル・ポストが抱えていた問いの核心部分に、たとえば人類学者のそれからは程遠く、いかにも文学者ならではと思われるような複雑な主観性が孕まれていたとしたら、それも致し方なしとしなければならない。だが、それはそれとして、ヴァン・デル・ポストは、人類学者に勝るとも劣らない情熱を傾け、ときに細心の注意を払いながら、野生のブッシュマンとの接触を試みる。その観察は、衣食住の詳細はもちろん、日常生活の隅々まで及び、人的交わりも、男女を問わず全世代に満遍なくゆきわたっているのだが、とはいうものの、そうした微に入り細を穿った観察も多彩な人的交わりも、人類学者ならいざ知らず、文学者にすればただうわつらを撫ぜただけにすぎなかった。それが証拠に、ヴァン・デル・ポストは、外なる存在としてのブッシュマンの印す境界線を踏み越えてさらに肉薄しようとするのである。

まずは、子どもころから強い興味を寄せてきた岩絵に期待を寄せるが、空しくもそれは裏切られる。

だが、なんということだ、ブッシュマンはもはや絵を描くことをしなかった。ブッシュマンの画家が絵を描くところをみたいという子どもころから持ち続けてきた夢は、満たされざるものの幽鬼の世界の仲間入りをしなければならなかった。(Ibid., p.241)

続いてかれは遊びに目をむける。「ブッシュマン・バトミントン」に、戦争を真似たパントマイム、そして、女たちのする「一種のラウンダーズ」といったものだが、ところが、そうしたたわいのない遊戯の観察からも収穫がないわけではなかった。戦争のパントマイムは、「なかば忘れかけた史実に基づくもの」だったし、とりわけ女たちのする「ラウンダーズ」には、興味深い唄の伴奏がともなっていたからである。その唄の文句が本文中に長々と引用されているが、これを期に、ヴァン・デル・ポストは唄と音楽のほうへと観察の目を移す。干し草の束

で拍子をとりながら、切々と女たちが歌う「草の唄」にかれは名状し難い感銘を受ける。

女たちはこの唄を繰り返して歌った。繰り返すごとに込められた想いは深くなり、意味を帯びていった。新約聖書が祈りを命ずるのにも似て、しつこくせがむよう心に強いられているかのように繰り返した。それにより人生と人生の諸力がそのもっとも深い懇願に近づけばいいとでも云うように。そうした歌声を聞いていると、じっさい呪文をかけられたような気分になったから、恋い焦がれる女たちの歌声の高まりを聴くうちに、しばしばブッシュマンの若者たちが我を忘れたようになったとしても不思議ではなかった。(Ibid., p.246)

あるいは、ブッシュマンの音楽について。

ヌホウはいつも音楽を奏でたが…かれの手にした楽器は音の荒野に意味を追い求める大きな弓にみえた。その矢には石や鉄の矢尻は付いていないが、秩序ある調べが矢となり、沈黙めがけ飛んでゆくのだった。(Ibid., p.247)

ある朝早く素晴らしい瞬間にかれの演奏を聴いた…砂漠は広大で澄みきっていたから、地平線に星がひとつまたひとつと昇ってくるのがはっきりとみえた…そのとき突然ヌホウがああ涯知らぬ旅の調べを奏ではじめたのだ。そのリズム、音色、遠い星の瞬き、銀河の岩にあたって砕け散る暗闇の波の巨大なうねり、それらが渾然一体となって鳴り響き、はじめてベートーベンの第九交響曲を聴いたときに劣らぬ感動を覚え身体が顫えた。人の声の大コーラスが不屈の高揚をみせながら、個人の運命の悲劇のなかに宇宙の意味をみつける最終決着の高みへと到るそのさまに。(Ibid.)

そんなふうに関時間をかけながらゆっくりと、ヴァン・デル・ポストは、内なるブッシュマンに接近してゆく。だが、あと少しというところで、かれの試みは挫折する。

ヌホウとその一族の者にむかって信仰について訊ねると、いつも断固たる拒絶の壁にぶつかった。こちらがなんの話をしているのか解からないといったふりをするばかりか、こちらの質問することについて論ずることをきっぱりと拒否し、たちまちそわそわと落ちつかなくなるから諦めるしかなかった。(Ibid., p.249)

あるいは、

ヌホウはいつかわたしのいるまえて、亀を捕まえた小さい男の子にむかって、それをおばあさんにあげたらお礼にお話を聞かせてもらえると云ったのだが、わたしがヌホウらにお話をしてくれと頼むと、「お話」とはなんのことなのか解からないと云うのだった…ある晩にはおばあさんが三人の子どもたち相手にお話を聞かせているところに偶然出くわした。けれども、わたしの姿をみるとあわててやめてしまった。そのまま続けるよう、どうかわたしにも聞かせてくれるよう頼んだが、おばあさんは耳が遠くて聞こえないふりをするのだった。(Ibid.)

これがアウトサイダーであるヴァン・デル・ポストの限界でもあったのだが、

子どものころから原始的な人たちと付き合いってきた長い経験のおかげで、こうした恐れにより示されているのが、真の宝物の在り処だということをわたしは知っていた。食べ物や飲み水の秘密、日常の繰り返しなら教えてくれるが、魂の問題となると事情は一変するのである。（Ibid., pp.249-250）

もちろん、そうしたもっともデリケートな場所に踏み込んでこそ意味がある。だが、賢明にも、ヴァン・デル・ポストは焦らず然るべき刻の到来を待つ。その間にも、乾季はじわじわその絶頂へと近づいてゆき、「とうとう真昼時には、あの勇敢なサンザシの葉までが灰となって崩れ落ちそうにみえた」。「一片の雲もないまま太陽は昇り沈んでいった。星でいっぱい在地平線に希望の稲妻が閃くこともなく、夜がきては去っていった。日ごとに恐怖の影が皆の意識のなかでその濃さを増していった」。

狩りにはできるだけ同行した。そのたびにブッシュマンのハンターとしての秀でた能力をいやというほどみせつけられたが、かれらは、「大カモシカを打ち取ってこそはじめて完全な狩りは達成されると信じていた」。ヴァン・デル・ポストらは、そのようにブッシュマンたちが特別視する大カモシカ猟に参加する。そして、見事雄カモシカを仕留めるのだが、これによりそれまで固く閉ざされていた扉がようやく突破される。大カモシカを射止めたことを感謝し祝う踊りへの参加を許される。奇しくもそれは乾季が明けると同時だったのだが、ここでヴァン・デル・ポストがわざわざ乾季を選んでカラハリ砂漠に踏み入っていることを思い出そう。ようするに、かれが一種のイニシエーションをなし遂げるのは、ぎりぎりの境目においてそうするということなのだ。ここでも「穿った見方」をすれば、そうした境目において、外なる探求と内なるそれとの重複という事実が、図らずも露呈された形になっているとも云えるだろう。外なる探求の挫折や進捗が、そのまま内なるその挫折や進捗になることを思えば、ここにおいてヴァン・デル・ポストは、意義深くも、あらゆる意味で境界線を踏み越えたとみてよい。この境界線のむこうに踏み出せば、「ブッシュマンとは何者か」というそもそもの問いの答えもみつかるだろうし、本稿が探ろうとしている oral literature の有り様も、それに寄り添うような形でみえてくるだろう。ここにきて話はいよいよ佳境に入ったというわけだ。

10

刻々と嵐の近づくなか、大カモシカの唄と踊りがはじまった。

聴こえてくる音楽は、豊かで変化に富み、優しく、この世のものならぬ憧れに満ちていた。不思議な綾とリズムがあり、人生の深い河の流れのように曲がり振れ、渦巻き逆流しながら、河床深く隠れてみえない障害物を避け海へと注いでゆく。（Ibid., p.265）

やがて大カモシカの踊りは、「ブッシュマンの踊りのなかでも最高の踊り」である「火の踊り」へと移行する。女たちが唄を歌い、積み重ねた薪火を男たちが輪になって囲み踊った。

あまりにも長く熱心に踊ったので、砂に描かれた円は溝になり、深く掘られてふくらはぎまで届いた…すると、いきなり輪がふたつに割れた。裸足で火の真ん中を通り抜け踊りだした…輪を離れ、火に魅入られた蛾のように頭から火のなかに飛び込む者もいる…。

こうしているあいだにも、潮のように音楽が高く低くなるなか、雷鳴がいよいよ大きく轟きだした。稲妻がたえず頭上に走り、踊り手たちを「ニーベルンゲンの金色」に染めあげた。(Ibid., pp.266-267)

疲労の極みに達した踊り手たちがひとりまたひとりと倒れてゆき、そしてついに、クライマックスの刻が訪れる。

こうしてちょうど真夜中ごろ、予定どおり、踊りの主人公である痩せて端正な顔だちのヌホウの叔父が、突然火を発見することになる…素手で火をつかむと立ち上がり、それを世界中に分け与えようと遠く広くまき散らす真似をする…ふらつく身体で身ぶりをまじえ、周囲の夜にむかって祈りの言葉を捧げた…わたしは神の存在を身近に感じた。突然の啓示に触れたかのように目のまえが真っ暗になった気がした…暗闇のなか稲妻の剣が鍵形に閃き、震える大地に恐ろしい一撃を加えた…その瞬間、雨が降りだした。

雨は一晩中降り続いた…万物の最初の言葉を再発見したような気分だった。雨を受け入れる大地の低い眩きが聴こえるようだった…近づいては耳を聳し、遠のいては厳かに響く雷鳴は、シナイの荒れ地の山のうえてモーゼが聞いたと伝えられる声に似ていた。夜が明けても、雨は激しく降り続き、木の葉にも草にも樹の皮にも、はや新しい生命の息吹が萌えだしていた。(Ibid., pp.267-268)

次の日、「かれらに会って以来はじめて共通の意味を持つ言語を手に入れた」と感じたヴァン・デル・ポストは、衝動に駆られ、「この世で最初のブッシュマンは誰だったのか」と訊いてみた。一瞬、ここでも肩すかしを食らうのかと思ったが、「オエング・オエング」だとその正体を明かしてくれた。それからあとは、創世の神話をはじめ、なんでもかれらは話してくれた。「声の調子をいろいろに変え、身ぶりをまじえながら、流れるように生き生きとかれらは話した」。そして、ある夕方の宵闇迫るころ、「雨の唄」を耳にする。恋し合うふたりのためのものであるこの唄は、雨季にはがらりと様相を変える砂漠の美しさを象徴しているようにみえた。無数の草花が大地を飾り、生き物という生き物が生命を謳歌している様子は、まさに一驚に値した。ブッシュマンとその住む世界の秘密の扉を、ついにヴァン・デル・ポストはこじ開けたのである。

なら、けっきょく、「ブッシュマンとは何者」だったのだろうか。ひとつには、苛酷な乾季のなか、智慧を働かせ水と食料を確保し、賢明にも生き抜く人たちのことを指す。涸れ果てた砂のどこを捜せば水が見つかるかかれらはちゃんと知っている。ダチョウの卵を使って器用にその水を保存することもできるし、女たちは砂のなかから巧みに食用になる植物をみつけた。老人たちは植物学者さながら狩猟に使う毒を調合し、狩りに出る男たちは、足跡ひとつで獲物の正体を見破る。辛抱強くどこまでもそれを追跡し、それでいて、どんなに遠くまで獲物を追いかけていってもけっして帰り道を見誤ることがない。そうしたことはなにひとつヴァン・デ

ル・ポストにはできないことだった。不用意に文明化した所為で、かつてはできたことができなくなってしまったのだが、それ以上に根本的世界観が、哲学が違ってしまっていた。「失われた世界」の核心にあるものとはじつにそれだったのである。そうした異なる世界観や哲学の本質をよく示す例として、ふたつ挙げることができるだろう。ブッシュマンたちは、適宜移動を繰り返しながら暮らしている。当然のことながら、歳をとれば、いつかそれについてゆけなくなる刻がくる。老人たちは置き去りにされ、ハイエナやジャッカルの餌食となる。そうした老人たちの行く末をみて「野蛮」のひとつで片づけてしまうとしたら、それこそここで云う世界観や哲学の決定的な相違が露呈していると見做してよい。生きることと死ぬことという、生命の両極端における態度がそこまで違えば、それらの中間で展開される個々のライフスタイルの相違について云々する必要などなくなってしまう。これと関連して、こうしたわれわれとの根本的相違を証拠立てる例としてもうひとつだけみておこう。「内気な繁殖者」とも綽名されるブッシュマンたちには極端に子どもが少ない。早魃期にブッシュマンの女たちは一種の不妊状態になるからである。「女が雨季に入って妊娠しても、雨が長続きせず、その出産により皆の生存が脅かされる早魃になったとしたら、生まれた子どもは即刻母親のもとから引き離される」。いうまでもなく、生まれた子どもを始末するためであるが、これも「野蛮」のふるまいのひとつとするなら、乾季や早魃の恐怖をあまりにも知らなさすぎる結果と云わなければならないだろう。生き延びるということの意味を、あまりにも自明のものとしすぎた結果であると。この点、ヴァン・デル・ポストには、身に滲みて共感できる理由があった。ひとつには、かれ自身辛くも「生き延びた」具体的な人生の経験があったからである。とりわけ、インドネシアで日本軍の捕虜になったとき、次々と死んでゆく戦友を看取り、また、自分も日々餓死の恐怖に顫えながらそれを生き延びた忘れ難い経験があった。さらに云えば、かれの身体のなかには、そうしたサヴァイバルを本領とするような古い血が流れていた。かれの母親がそれまでの安楽な生活を捨て、カラハリ砂漠の縁に忘れられたようになっていた広大な土地の開拓に乗り出していったのは、なんと八十歳になってからだった。この癒し難い開拓者精神とは、裏を返せば、「生き延びる」ことに対する飽くなき憧れともみることができる。それをヴァン・デル・ポストは文字どおり受け継いでいたのであるが、とするなら、そこにこそ、ヴァン・デル・ポストとブッシュマンとのもっとも密接な接点は求められるだろうし、「ブッシュマンとは何者か」という問いの答えもみつけられる。先に指摘したように、ヴァン・デル・ポストが無闇にブッシュマンを理想視したがったのも、じつに無理ない自然な成り行きだったというわけである。

では、そのような結論から導き出される oral literature とはどのようなものと云えるだろうか。ひとつには、それは、物理的な意味で何重にも隔てられた砂漠の最奥においてのみみいだされるものであるということ。しかも、そこに辿り着いたところで、頼めば即座に分け与えられるような安易な代物ではなかった。物理的な距離にもまして目にみえない次元に抜がる隔たりをさらに越えなければならない。そのようにゆく手を阻み立ちはだかる壁を無理にひと言で要約すれば、「原始」の一語に尽きるだろうが、ヴァン・デル・ポストがその壁を突破できたのは、うえてみたように、ひとえにサヴァイバルという核心的な一点においてブッシュマンと経験を共有することができたからである。とするなら、そうした稀な経験を期待できない通常の間人には、うわつつらを越えてブッシュマンやその oral literature にアプローチすることはきわめて難しいことになる。ようするに、普通には、最初から解かりきっているような答えを

出すだけの、知的遊戯にしかなり得ないということなのだが、そんなふうにならずに、幾重にも積み重なる「原始」の層を一枚一枚丹念に剥がしてゆきながら、その過程で貴重な発見をいくつもし、ユングの云う原型にも等しい、それでいてありきたりな普遍化の自己満足を脱した、まさしく事柄の基底部を探るような試みは完全に不可能なのだろうか。その手助けを、ヴァン・デル・ポストはしてくれるだろうか。次にはその答えを探ってみたいと思っている。

REFERENCES

- Carpenter, Frederic. 1969. *Laurens van der Post*. Twayne, New York.
- van der Post, Laurens. 1952. *Venture to the Interior*. The Hogarth Press, London.
1954. *A Bar of Shadow*. The Hogarth Press, London.
1958. *The Lost World of the Kalahari*. The Hogarth Press, London.
1961. *The Heart of the Hunter*. The Hogarth Press, London.